主日礼拝説教「見えていますか、聞こえていますか？」予稿

日本基督教団石神井教会　2017年2月5日

【旧約聖書日課】イザヤ書　6章1～12節

1ウジヤ王が死んだ年のことである。わたしは、高く天にある御座に主が座しておられ
るのを見た。衣の裾は神殿いっぱいに広がっていた。2上の方にはセラフィムがいて、そ
れぞれ六つの翼を持ち、二つをもって顔を覆い、二つをもって足を覆い、二つをもって飛
び交っていた。3彼らは互いに呼び交わし、唱えた。
「聖なる、聖なる、聖なる万軍の主。主の栄光は、地をすべて覆う。」
4この呼び交わす声によって、神殿の入り口の敷居は揺れ動き、神殿は煙に満たされた。
5わたしは言った。「災いだ。わたしは滅ぼされる。わたしは汚れた唇の者。汚れた唇の
民の中に住む者。しかも、わたしの目は王なる万軍の主を仰ぎ見た。」
6するとセラフィムのひとりが、わたしのところに飛んで来た。その手には祭壇から火
鋏で取った炭火があった。7彼はわたしの口に火を触れさせて言った。「見よ、これがあ
なたの唇に触れたので、あなたの咎は取り去られ、罪は赦された。」
8 そのとき、わたしは主の御声を聞いた。「誰を遣わすべきか。誰が我々に代わって行く
だろうか。」
わたしは言った。「わたしがここにおります。わたしを遣わしてください。」
9 主は言われた。
「行け、この民に言うがよい、
よく聞け、しかし理解するな、よく見よ、しかし悟るな、と。
10 この民の心をかたくなにし、耳を鈍く、目を暗くせよ。
目で見ることなく、耳で聞くことなく、
その心で理解することなく、悔い改めていやされることのないために。」
11 わたしは言った。「主よ、いつまでですか。」
主は答えられた。「町々が崩れ去って、住む者もなく、家々には人影もなく、大地が荒
廃して崩れ去るときまで。」
12 主は人を遠くへ移される。国の中央にすら見捨てられたところが多くなる。
13 なお、そこに十分の一が残るが、それも焼き尽くされる。
切り倒されたテレビンの木、樫の木のように。
しかし、それでも切り株が残る。その切り株とは聖なる種子である。

【福音書日課】マタイによる福音書　13章10～17節

10弟子たちはイエスに近寄って、「なぜ、あの人たちにはたとえを用いてお話しになる
のですか」と言った。11イエスはお答えになった。「あなたがたには天の国の秘密を悟る
ことが許されているが、あの人たちには許されていないからである。12持っている人は更
に与えられて豊かになるが、持っていない人は持っているものまでも取り上げられる。13
だから、彼らにはたとえを用いて話すのだ。見ても見ず、聞いても聞かず、理解できない
からである。14イザヤの預言は、彼らによって実現した。
『あなたたちは聞くには聞くが、決して理解せず、見るには見るが、決して認めない。
15 この民の心は鈍り、耳は遠くなり、目は閉じてしまった。
こうして、彼らは目で見ることなく、耳で聞くことなく、心で理解せず、悔い改めない。
わたしは彼らをいやさない。』
16しかし、あなたがたの目は見ているから幸いだ。あなたがたの耳は聞いているから幸い
だ。17はっきり言っておく。多くの預言者や正しい人たちは、あなたがたが見ているもの
を見たかったが、見ることができず、あなたがたが聞いているものを聞きたかったが、聞
けなかったのである。」

あなたがたの目は、耳は、幸い！

今ご一緒に、讃美歌 21－57 番「ガリラヤの風かおる丘で」を歌いました。『讃美歌 21』は出版されてちょうど 20 年が経ちましたが、この讃美歌「ガリラヤの風かおる丘で」は、『讃美歌 21』が出版されたことで広く歌われるようになった代表的な讃美歌の一つではないかと思います。皆さんの中にも、「『讃美歌 21』は苦手だけれども、この讃美歌は好き」という方がいらっしゃるのではないでしょうか。この讃美歌は、繰り返し、「…みことばを、わたしにも聞かせてください」と歌います。礼拝で、聖書が朗読され、説教が語られる、そのときに合わせて歌われるのに、これほどふさわしい歌詞の讃美歌は、なかなかありません。

「主よ、御言葉を聞かせてください」との思いを心に秘めながら、わたしたちは、主日ごとの教会の礼拝へと集ってきます。礼拝で、聖書が開かれ、そこに記された御言葉が朗読され、さらに御言葉が説教を通して宣べ告げられる。それが、どのような形でなされるかは様々であっても、そのことがなされない礼拝というものは、キリスト教会では、あり得ません。それは、キリスト教会が、まだユダヤ教の会堂礼拝から別れ出る前からの、いわば生まれる前から定まっていた生き方であり、それ無しには存在し得ない命綱でもあると言ってよいでしょう。

このようなことを改めて申し上げると、「そんな当たり前のことを、今さら」と思われる方もあるかもしれません。確かにそうです。それは、今日初めて教会の礼拝にいらっしゃった方にお話しするような、初歩的なことかもしれません。わたしたちは皆、教会に、ことに礼拝に、御言葉を聞くために来ている。取りわけ、主イエス・キリストのお語りくださった福音の御言葉を聞くために、わたしたちは礼拝にあずかっている。このキリストの福音の御言葉を聞く者としていただいた幸いを確かめるために、その幸いの中に留まるために、わたしたちは、主の日ごとに礼拝に集い、日ごとに聖書を開く、という生活をしているのです。

御言葉を聞くために、教会に集められてこられた皆さんは、幸いです。この御言葉を聞くことを知らずに過ごしている多くの人たちが、わたしたちの周囲にはいらっしゃるのです。あるいは、この御言葉を聞くことができなくなってしまった人たちが、わたしたちのすぐ近くに、少なからずいらっしゃるのです。主の日ごとに、聖書の御言葉を耳にすることができる皆さんは、幸いです。礼拝ごとに、主イエス・キリストの福音の御言葉を聞くことができる皆さんは、幸いです。

ただ、その幸いなる皆さんに、わたしは、今日の福音書の御言葉から、一つのことを加えさせていただかなければいけません。

皆さんは、主の日ごとに、ただ御言葉を聞くだけのために、礼拝に来られているのではありません。皆さんが幸いなのは、教会で、ただ御言葉を聞くことができるから、だけなのではないのです。皆さんが幸いなのは、ここで、福音の御言葉の現実を見ることができるから、でもある。皆さんは、ここに、御言葉の真実を見るために、集められていらっしゃる。

それが、今日の福音書で主イエスが「**あなたがたの目は見ているから幸いだ。あなたがたの耳は聞いているから幸いだ**」とおっしゃられていることなのです。

「天の国の秘密」

主イエスは、このとき、大勢の群衆を前にして、「たとえ」を用いて多くのことをお語りになられていました。その合間に、しばしの休憩時間でも設けたのでしょうか、弟子たちが近寄ってきて、主イエスに尋ねた、「**なぜ、あの人たちにはたとえを用いてお話しになるのですか**」と。それに対するお答えの中で、主イエスは、弟子たちに、「**あなたがたの目は見ているから幸いだ。あなたがたの耳はきいているから幸いだ**」とおっしゃられた。そう、あの「山上の説教」（マタイ 5~7 章）の冒頭で繰り返された「…幸いだ＝幸いなるかな…」と同じ言い方で、主イエスは、おっしゃられた。「幸いなるかな、あなたがたの見ている目は。幸いなるかな、あなたがたの聞いている耳は」と。

主イエスは、「あなたがたの目が見ている**ならば**、幸いだ」とおっしゃられたのでは、ありません。「あなたがたの耳が聞いている**ならば**、幸いだ」とおっしゃられたのでは、ありません。「あなたがたの目は、**すでに**見ているから、幸い」、「あなたがたの耳は、**すでに**聞いているから、幸い」とおっしゃられている。

「幸い」とは、祝福を告げる言葉です。主イエスは、ご自分のすぐ近くにいるようにと呼び集め、従わせられていた弟子たちに、祝福をお告げくださったのです。何となれば、今まさに、弟子たちの目は、主イエスのお姿を見ていたからです。弟子たちの耳は、主イエスの言葉を聞いていたからです。

けれども、皆さん、これは、わたしたちにもお語りくださっている祝福の言葉なのです。主イエスに招かれ、導かれて、キリストの教会へと集う者とされたわたしたちに、主イエスは、今、お告げくださっている。「あなたがたの目は、見ているから、幸いだ」と。「あなたがたの耳は、聞いているから、幸いだ」と。何となれば、わたしたちの目は、今まさに、ここで、キリストの御体を垣間見る者とされているからです。わたしたちの耳は、今ここで、キリストの御声の響きを聴き取る者とされているからです。

わたしは、皆さんが何か神秘体験をするようにと、誘導しているわけではありません。神秘体験ではなく、わたしたちは、キリストの御名によって集められた教会で、確かに、キリストとお会いするという出来事を経験しているのです。その出来事を経験するのは、ひとり祈りに没頭しているときでは、ありません。ひとり讃美の歌声と共に「第三の天にまで引き上げられ」（Ⅱコリ 12:2）ているときでは、ありません。ひとり聖書を黙読しているときでも、ありません。わたしたちが、共に祈りを合わせているとき、共に讃美の歌声を聴き合うとき、共に聖書の御言葉を語り合うとき、そのようなときに、わたしたちは、キリストとお会いさせていただくという出来事を経験しているのです。何となれば、ここに共にいる一人ひとりこそ、洗礼によってキリストと結ばれた人に他ならないのです。ここで共に礼拝にあずかるお互いこそ、キリストの宿られたキリスト者、キリストのお姿とその御声の響きをわたしたちに届けてくれる器に他ならないのです。

ここに「天の国の秘密（ミュステリオン）」があるのです。

理解できない「あの人たち」とは誰か？

わたしたちは、もちろん、ひとり祈りに没頭するときに、キリストに触れていただくこともあるでしょう。ひとり讃美の歌声と共に、天上の御父に近づかせていただくこともあるでしょう。ひとり聖書の御言葉に聞き入る中で、主の御声を聴かせていただくこともあるでしょう。日々の祈りの生活の中で、そのような祈りと賛美と御言葉の黙想に習熟していくことを、願わないではいられません。

そうであるとしても、わたしたちは、教会へと招き集められてきました。キリストに結ばれる「洗礼」と、キリストの御体と一つにされる「聖餐」によって立てられた「教会」という共同体に加えられているのが、わたしたちなのです。少なくとも、洗礼を受けられた皆さんは、そのような教会共同体に招き入れられて、教会の営みのうちにキリストとお会いする出来事を繰り返し経験するようにと、その出来事を人々に証しするようにと、使命を与えられた皆さんなのです。ひとり孤独に自分の信仰を深めるという道ではなく、「教会」という共同体で、共に祈り、共に讃美し、共に御言葉を語り合い、そうすることによって、互いの存在の中にお働きくださっている神の御業、キリストの御働きを憶え合う。そこで、キリストとお会いさせていただく出来事を経験する。そのような信仰の道を歩むようにと、わたしたちは、導かれてきたのです。

それは、わたしたちが、そう願ったからではないのです。キリストが、わたしたち一人ひとりをお選びくださり、お近くにお呼び寄せくださり、洗礼のしるしによって離れがたくご自身と結びつけてくださったのです。わたしたちが願ったからではなく、わたしたちが願う前に、わたしたちの願いとはまったく違うところで、わたしたちは、洗礼を受けてキリスト者とされてきたのです。

あの弟子たちこそが、そのように主イエスのもとに呼び集められ、従わせられた者たちでした。弟子として主イエスの近くにいるようにされた者たちは、だれも、自分から願い出て主イエスの弟子となったのではなかったのです。にもかかわらず、否、だからこそ、彼らは、主イエスが本当にお見せになろうとなさったお姿を見る者とされ、主イエスが本当にお教えになろうとなさった御言葉を聞く者とされていったのです。彼らには、主イエスに対する期待がなかったので、その分、先入観なく、主イエスがお示しになるご自身の姿を見ることができ、主イエスがお語りになる御言葉を聴くことができたのです。

主イエスは、そのような弟子たちの対極にある者として、主イエスに大きな期待を持って集まってきていた多くの人々のことを、「**見ても見ず、聞いても聞かず、理解できない**」と言われています。人は、自分の中に見たいものがあり、聞きたいことがあるときには、見たいものしか見ず、聞きたいことしか聞かないからです。それは、しかし、ある特定の人たちのことを指しているのではないでしょう。弟子たちの中にも、わたしたちの中にも、そのような傾向がある。そのような傾向に偏ったとき、わたしたちもまた、「天の国の秘密」が分からなくなるのです。「教会」共同体に加えられている意味が、分からなくなるのです。

だからこそ、主は、わたしたちが立つべきところを告げてくださったのです。

「あなたがたの目は、今、見ているから幸いだ。耳は聞いているから幸いだ。」